

2014年
12月22日
月曜日

●退任教授最終チャペル講話／土井教之 教授（産業組織論）

変化、自己変革および選択

今年度をもって定年退職します。実に41年間経済学部で勤めることになるが、この間を一言で言い表せば「変化」ということになります。

私の専門はミクロ経済学、産業組織論ですが、その内容は教師として勤め出してから今日までに大きく変化してきた。こうした変化に対応するのは、ある意味大変です。変化に対応できなければ、先端的な議論をあまりすることができません。より具体的には、経済学は、自然科学と同様に、多分にグローバルな分野で、世界的に標準化されているところが多く、研究者としての成果発表の場、すなわち競争の場は国際レベルであり、そのために特に近年、研究成果は国際的な雑誌（査読制）に論文を投稿し掲載することが求められていく。しかし、容易に掲載の許可は得られません。どのように対応するか、思い悩む日々でした。

大きな変化は、また経済学部でも見られました。もちろん教員の構成の変化だけでなく、教育、研究など、

さまざまな側面で変化が起こりました。この変化は関西学院大学の変化でもあり、そしてまた日本の大学全体の変化、ひいては日本、日本経済の変化を反映しています。私がこうした変化の中に身を置いたことは、振り返ればいろいろな経験ができたことを意味し、ある意味で幸せでした。

こうした変化の中に身を置くことは、他方で変化に対応するために「自分を変える」（自己変革）ことを意味します。しかし、「自分を変えること」は容易ではありません。私は残念ながら挫折の繰り返しです。皆さんも、高校から大学へと、環境の変化を経験し、新たな自分を模索しているはずですが、将来の夢に向かって努力するために、自分を変えようと思ったことでしよう。皆さんの、自分についての中間評価はいかががでしょうか。「自分を変えること」が世界的に注目されており、スタンフォード大学のケリー・マクゴニガルの『スタンフォードの自分を変える教室』が世界的なベストセラーとなりました

た。この本は、スタンフォード大学の人気講義、いわゆる白熱講義をまとめたものであり、「自分を変える」ことを科学的に考察し、変えることの失敗あるいは成功のメカニズムを説明し、そして成功のヒントを示そうとしています。自己の中間評価で成功あるいはうまくいきつつあると考える人もそうでない人も是非読んで参考にしていただきたい。

また、「自分を変えること」は、しばしば「選択」を伴います。人生にとつて「選択」も重要です。「選択の科学」という、コロンビア大学の研究者、シーナ・アイエンガーが自分の講義（これも、NHKでの白熱授業として放送されました）をまとめた本が、同様に世界的にベストセラーとなりました。選択・決断のメカニズムおよびその重要性を科学的に分析し、私たちがその行動について人生上のヒントを示しています。この本もみなさんに役に立つ示唆を含んでいます。是非、読んでください。

以上、私は、自分の経験から変化

と選択の重要性に注目して、二つの興味ある本を紹介しました。それぞれについて詳しく内容を述べません。それは、皆さんがそれぞれ自分で読んで考えてほしいからです。「自分を変えること」そして「選択」は、本質的にすぐれて個別的である。これらの本を読んで、自己の中間評価を行ってください。

最後に、経済学部の教員は、外国雑誌に論文を掲載し、国際学会で報告するなど、国際的に活動している人が多く、優秀です。そうした教員の授業を通して、学生諸君はもつと勉強し、理解力（悟性）と問題意識・判断力（感性）を磨いてほしい。特に、感性が重要です。これまで「関西学院は、関西学院大学の学生であると同時に、関西学院大学の学生であってほしい」と言ってきた。問題意識、判断力を養うと、attractive（魅力的）な学生となるはずですが、この単語は、active（行動的、積極的）という綴りを含んでいる。すなわち、感性を磨いて「行動的で魅力的な」学生となるはずですが。■